

オリーブの木

No. 59
2016年 2月



▲スタディツアーの事前研修での一コマ (先輩も交えてのランチ)

2015年は、紛争地で活動していた日本人2人がISによって殺害されるなど、悲惨な事件が次々と起こりました。パリのテロ事件をはじめ、世界各地で暴力の連鎖は広がり続けています。絶望的な状態におかれた若者がそれを打破しようと暴力に訴えますが、何の解決にも至らず、ますます混迷を深めるばかりです。その典型的な例がイスラエル・パレスチナでしょう。

先日行われたスタディツアーの事前研修中 (cf. p.3)、参加した若者たちは、「平和とは」というワークショップで「赦し」という言葉を必須条件としてあげました。どちらかが赦すのでなければ、暴力の連鎖は断ち切れないし、平和の実現はできないということです。「赦す」と言う行為は本当に難しいことです。しかし若者たちのこの「気づき」は、私に大きな希望と慰めを与えてくれました。

聖地に暮らす若者たち、子どもたちにこれからも温かいご支援をお願い申し上げます。

井上 弘子 スタッフ一同



認定NPO法人
聖地のこどもを支える会



当NPOは、国際協力NGOセンター (JANIC) によるアカウンタビリティ・セルフチェックを受け、基準の4分野 (組織運営・事業実施・会計・情報公開) について適正に運営されていると審査されました。

事務局 〒164-0003 東京都中野区東中野 5-8-7-502 **Email** ispalejpn@gmail.com **TEL/FAX** 03-6908-6571

ご支援は… 郵便振替 **00180-4-88173** 加入者名 「NPO法人 聖地のこどもを支える会」

当法人へのご寄付は、税制優遇が受けられます。

<http://seichi-no-kodomo.org>

「聖地のこどもを支える会」のユースチームが結成されました！

支援者の皆さま、初めまして。2015年春のスタディツアーに参加した、大学3年の花田真凜（しんり）です。いつも温かいご支援をいただき、本当にありがとうございます。

この度、NPO法人「聖地のこどもを支える会」を学生ボランティアとして支えるユース（若者）チームを結成しました。自らの手でイスラエル・パレスチナの「平和」のために働きたいと決意した、私たち若者たちのグループについてご紹介します。



写真左から かずき（協力メンバー）、ゆうき、しんり、せんちゃん、てっちゃん

設立経緯

これまで当NPO法人では、「平和の架け橋」や「平和を願う対話の旅」などの活動を毎年行ってきました。その成果として、これまでこれらのプロジェクトやスタディツアーに参加したイスラエル、パレスチナ、日本の3カ国の青年たちの人生に大きな影響を与え、過去の日本人プロジェクト参加者の中にはイスラエル・パレスチナに直接的、間接的に関わるような仕事に就き、日本で、世界で活躍する人材を輩出してきました。しかしながら、これらのプロジェクトはそれぞれが単発的なもので、各回のプロジェクト参加者が互いに繋がりをもつ機会はあまりありませんでした。また、参加者からのプロジェクトへの評価は高いものの、まだまだ学生など若い世代にこのNPOの活動が知られていません。それで何とかこのNPOの有意義な活動のお手伝いをしたいと、昨年10月に、私たち、プロジェクトやスタディツアーに参加経験のある有志数名がこのユースチームを結成しました。

活動目的

ユースチームが掲げる活動目的は、

- ① プロジェクト参加者の間に繋がりを築き、プロジェクト参加者の結束を強めること
- ② 「聖地のこどもを支える会」の活動をさらに広め、より多くの人にイスラエル・パレスチナについて知ってもらうこと
- ③ プロジェクト参加経験者の視点からより良いプロジェクト作りに寄与すること、
- ④ この活動を通して、ユース自身が、未来において平和を築くことができる人に成長すること、

以上の4つを掲げ、活動していきます。なお、結成して間もないチームですので、さらにチームの方向性を話し合っ、より良い活動を目指します。

活動内容

ユースチームの具体的な活動は大きく分けて3つあります。一つ目に広報・ファンドレイジング、二つ目にスタディツアー・その他プロジェクトの企画・運営、三つ目に各回プロジェクト参加者・スタッフを繋ぐイベントの開催です。

一つ目の広報・ファンドレイジングでは、SNS等を利用し各プロジェクトの広報を行い、またNPOの資金確保のためのクラウドファンディングを行っていきます。

二つ目のプロジェクトの企画・運営は、過去の参加経験を踏まえ、より若者の視点に立ったプロジェクトを作り、運営していきます。

三つ目の各回プロジェクト参加者・スタッフ間の繋がり構築では、具体的には年に数回の懇親会や食事会などのイベントを開催していきます。

これまでしてきたこと・これからのこと

ユースチームはこれまで、スタディツアー説明会やその広報、クラウドファンディングを利用した資金調達、歴代のプロジェクト参加者との懇親会などを行ってきました。さらに1月30日、31日にJICAで行われた、2016年スタディツアーの事前研修のプログラム作りや実施など、スタッフとしても働きました。

これからしていきたいことは、同世代あるいは広く一般を対象としたイスラエル・パレスチナに関す

る勉強会、高校や大学への訪問授業、各種広報物の作成などです。

始まったばかりのユースチームですが、当NPO法人に関わって下さっているすべての方々と人間とし

ての繋がりを結び、またイスラエル・パレスチナの若者たちと友となり、彼らとともに「平和のスクラム」を築いていきたいと望んでいます。皆様の応援をお願いいたします。

スタディツアー〈平和を願う対話の旅〉2016

第1回事前研修を行いました 2016年1月30日(土)・31日(日)



今年も、3月に12日間にわたって、日本人大学生のためにイスラエル・パレスチナ スタディツアーを行います。現地の多少不穏な情勢のためでしょうか、参加者は5名です。

第1回事前研修で若者たちは、多くのことを学びました。初めてイスラエル・パレスチナ紛争を身近に感じ、現地の人々の苦しみに共感した彼らの決意をお届けします。

今回の事前研修は、新しく結成されたユース・グループが準備から実施までを主体的に行いました。なかなか充実した内容で、ツアー参加者をおおいに励ます研修となりました。

参加者の決意表明

梶原 裕史

研修を受けて、イスラエル・パレスチナのさまざまな現実を直視するにあたり、理想や夢といったものが通用しない世界である気がした。悲惨な現実が広がる前にあっては、何か希望ある言葉を言ったところで意味をなさないのではないかと思った。しかし、ふと自分がこのツアーの面接を受けた時を思い出した。その時、井上弘子理事長に対し、平和につい

て自分はさまざまな意見を述べ立てた。平和には正義の一致が必要だ、また紛争解決のためには叡智を用いて他者を慮る心が重要だ、などなど。だがそれらはあくまで政治論ばかりであった。そんな私に対して理事長は、「向こうの人たちと友だちになろう」、「みんな違ってみんな良い」と言われた。

研修でイスラエルとパレスチナの問題を改めて考え、そのことばは大切だと痛感している。彼らは毎日紛争の現実と直面しているのだから、自分が政治論を述べるばかりでは、彼らが希望の道を見出す助けにはならないであろう。だから、友だちになりたい、現地の人々に笑顔になってもらいたい、そして平和になってもらいたいと心から願う私たちの思いこそ、彼らにとって光となり励ましになると信ずる。このことを念頭に置いて、スタディツアーに参加したい。

加藤 結子

私はなぜここまで平和や人道支援にこだわるのか？ その問いに対しまだ明確な答えを持っていない。にもかかわらず、決して諦めることができず、医師として活動するチャンスをつかみ、このスタディツアーへ参加するに至った。

2日間の研修を通し、パレスチナ・イスラエルに関する知識を深めることができた。とともに、自分自身のものの見方・考え方の未熟さも痛感した。そして平和の重みに潰されそうにもなった。自身の問題点が浮き彫りになった今、実際現地に赴き、そこに生きる人々の生の感情に触れるということに、幾ばくかの不安の感情が生まれた。

しかしながら、それでもこの目で見たい、肌で感じたいという気持ちはより強くなったし、やっぱり生涯にわたって人道支援に携わりたいと強く思った

のも紛れもない事実である。

スタディツアーにおいて、当初は医師としてどのようにパレスチナ問題に関与していけるか探りたいと考えていたが、今回は現地に存在する空気感をまず感じ、自分がそこで何を思うのか、イスラエル・パレスチナに身を委ねてみようと思う。そして、友だちの絆が一本でも繋がれば良いと願っている。

辰巳 奈緒

第1回事前研修を通じて、教科書から得られる平面的な情報ではなく、リアルな体験談を交えた立体的な情報を得ることができました。単に知識として蓄積されたものと違って、立体的な情報があれば、もっと肌感覚をもって相手の問題を理解することができるでしょう。多くの日本人のパレスチナ問題に対する認識は、「知識」にとどまっていると感じます。私たちは、現地で苦しんでいる人々の状況をもっと想像力を働かせて理解しようと努力しなければなりません。

イスラエルとパレスチナの間には分離壁が存在しますが、この日本人の無関心は、日本とパレスチナの間は無意識のうちに壁ができていていることを示していると思います。

この壁を打破して、日本人にももっとパレスチナ問題を他人事ではなく「自分事」として捉えてもらうためにも、私は今回のスタディツアーで自分の目で見、自分の耳で聞いたイスラエル人・パレスチナ人の状況を、“圧倒的な肌感覚のある情報”として日本の人々に届けたいと思っています。

確かに「日本人」という第三者は傍観者かもしれませんが、しかし、当事者であるイスラエル人・パレスチナ人はそれまで積み重ねてきた歴史や犠牲の重みから、偏向した視点で状況を捉えてしまいがちではないでしょうか。だからこそ、日本人として両者の声を中立的に聞き取り、両者の置かれている状況を客観的に日本に伝えたいと思っています。

ただし、何も事情のわからない部外者の日本人が突然彼らのコミュニティーに飛び込んだところで、彼らは決して心を開いてくれないと思います。そこで、まずは彼らと友だちになり、関係を築くことから始

めたいです。また、彼らへの十分な理解をもって互いに語り合えるよう、事前にできるだけいろいろなことを学んだうえで参加したいと思っています。

お世話になる皆様、精一杯頑張りますので、どうぞよろしくお願いいたします。

渡邊 まり

事前研修を終え、スタディー・ツアーに参加する目的と決意をあらためて表明します。

1. 目的

- ① イスラエル・パレスチナの現状・現実を構造的に・本質的に理解すること
- ② 以前、人間関係や語学の問題などで悩み落ち込んでしまったことがあるが、その過去を乗り越え、自分自身を成長させること
- ③ 実際に現地へ行き、自分の目で見、自分の耳で聞くことによって、平和実現のために必要不可欠な他者への理解力や想像力を身につけること
- ④ この事前研修で得た気づきや発見や思いを深めること

2. 決意：ツアーを実りあるものにするために

- ① くだらないことで悩んだり落ち込んだりせず、目的を忘れないこと
- ② 積極的に自分から学び、何でも吸収するという姿勢でいること
- ③ 感謝の気持ち、謙虚な気持ちを忘れないこと
- ④ スタディツアーまでに、語学力、知識、思考力や伝え方などを磨くこと

以上が私の決意です。

認定NPO法人聖地のこどもを支える会の 会員になりませんか？

さまざまなプロジェクトをはじめ、教育支援事業など、当会の活動を総合的に支えていただく会員制度。あなたのご意見が、平和のつくり手を育てます。事務局までお気軽にお申し出ください。

正会員 個人	年額 12,000円／1口
学生	年額 6,000円／1口
サポート会員	年額 6,000円／1口

正会員は、当法人の総会等での議決権を行使することができます。

憎しみ合いの闇を照らす文化交流の灯

村上 宏一（当法人理事・元朝日新聞中東アフリカ総局長）

フランスの指揮者で作曲家のピエール・ブーレーズ氏が1月5日、死去しました（享年90歳）。指揮者として名前を知っているだけでしたが、イスラエル人やパレスチナ人などの若い演奏者たちと音楽活動をしていたことを知る機会を得ました。エジプトで旅行業に携わる夫と共に、長くカイロに暮らしてきた方の情報によるものです。その方、中野眞由美さんは、現在では現地と日本を行き来して時折、NHKのラジオ深夜放送でエジプトの暮らしや文化などについてレポートをしています。

中野さんの情報によると、ブーレーズ氏は80歳を過ぎて、パレスチナ人、イスラエル人、エジプト人やその他のアラブ諸国の若者奏者たちと音楽の造形を巡って、何度もワークショップを経ながら緻密な音楽世界を築いてきたそうです。皮切りとなったのは2007年夏のザルツブルク音楽祭で、やはり指揮者のバレンボイム氏と共にパレスチナ人、イスラエル人、エジプト人などを対象に開いた「聴くことの学校」というワークショップです。ここにはウエスト＝イースタン・ディヴァン管弦楽団の演奏家たちも加わっていました。

この管弦楽団は、バレンボイム氏とパレスチナ系文学者の故エドワード・サイド氏が設立したもので、イスラエル、パレスチナ、アラブ諸国出身の若い音楽家たちを団員とし、度々ヨルダン川西岸のパレスチナ自治区で演奏会を催していることで知られます。パレスチナ問題の解決は軍事的な手段ではなく、民族間の対話によるしかない、という考えのもと、文化を通じてお互いを知る機会を作ろうとしているのです。



1993年のオスロ合意でパレスチナ自治への道が開かれる以前の占領下のパレスチナ地区では、東洋人の筆者が歩いていると行く先々で、若者や小さな男の子たちが「KARATE」と言いながら寄ってきて、空手のしぐさをしたものです。イスラエル兵に屈辱的な扱いを受けても、銃で武

装した相手に抵抗しようもない現実の中、当時はやっていた香港映画でブルース・リー演じる主人公が素手で敵をやっつける様子に、「自分たちもあのようにやれたら」と憧れていたのでしょうか。

自治政府ができた時、イスラエル政府は自治政府警察に武器供与する協定を結びました。その狙いは、イスラエルとの和平に応じた故アラファト議長率いるパレスチナ側主流派に、イスラエルとの共存を認めない反対派を武力で抑え込ませることでした。それはともかく、おおっぴらに銃を手に入れられるようになったパレスチナ指導部は、軍事的にイスラエルに圧力をかけられると勘違いしてしまったのではないかと思います。交渉による自治権の拡大が進まないことへの反発が強まる中、2000年9月に始まったパレスチナ人による2度目の大規模な民衆蜂起「インティファダ」では、1度目のインティファダ（1987年末～1993年）が主に投石でイスラエル軍に立ち向かったのに対し、銃などの武器が使われました。しかし、軍事的に対抗するといっても、パレスチナ側が銃とせいぜいロケット弾を使うのに対し、イスラエル側は戦車、大砲、戦闘機からのミサイルまで使うのですから、相手になりません。力で歯向かってくるなら何倍もの力で叩き潰し、力の差を思い知らせる、というのがイスラエル側の戦略です。まともな軍事的手段ではどうにもならないのです。

昔から、圧倒的な武力を背にした権力者に支配される側が、その状況を軍事的に切り開こうとすると、非正規の武力＝テロに走ったものです。それは激しい反撃を招き、さらに強い抑圧をもたらします。一方、支配する側にしても、絶え間ない警戒と緊張で社会の健全さは失われていきます。そんなことを考えているとき、テレビで南アフリカ共和国が黒人差別のアパルトヘイト政策を廃止した時の白人最後の大統領をめぐるドキュメンタリー番組を見ました。南アの白人政権による支配は強固で、黒人の武力闘争は犠牲を増やすばかり

でした。とはいえ、アパルトヘイトへの国際的な批判が高まり、経済制裁も強まる中で国家経営は行き詰まり、差別廃止に踏み切らざるを得なくなったわけです。

番組の中で印象に残ったのは、最後の方で紹介された黒人の若者たちのことです。アパルトヘイト廃止後に生まれた世代を「born free世代」と呼ぶそうですが、彼らは白人過激派による虐殺などの過去に、そうこだわらないというのです。白人支配下の過酷な差別も、それを経験しない状況が続くと上の世代の恨みが継承されなくなっているようなのです。

イスラエル人とパレスチナ人の間で憎しみや恨みが子や孫の世代に引き継がれないためには、殺し合いや屈辱の光景がない状況が何十年か続く必要があると思うことが、よくあります。そうすれば、たとえパレスチナ人の老人がイスラエル兵に暴行を受けたとか、イスラエルの刑務所に入れられたとかの苦い思い出を話しても、目の前にそのような現実を見ない若者たちは深刻な思いで聞かないでしょう。南アで実際にそのような状況が見られるという報道は、わずかながら希望を持たせてくれます。

ただし現在のイスラエル・パレスチナ情勢は、少年・少女たちがイスラエル人をナイフで襲う事件が相次ぐなど暗いものです。これでは、イスラエル側の治安重視の意識はますます厚く固いものになり、対話の機運が入り込む隙間がなくなります。「聖地の子どもを支える会」の目指す交流も、これまでも増して難しくなるでしょう。そんな中、ブーレース氏やバレンボイム氏のような著名人が道をつけ、国際的に評価される文化交流の試みは、同じ目標を掲げる小さなNPO活動にとって、行く先を照らしてくれる灯のようです。



私の選択 ヨルダンのパレスチナ難民 キャンプに派遣されて

2012年スタディツアー参加者・H. I.

支援者の皆様、こんにちは。私は現在、青年海外協力隊の一員としてパレスチナの隣国ヨルダンに派遣されています。任期は2年、パレスチナ難民キャンプで知的障害児の指導をすることになっています。

ヨルダンといってもあまりイメージがわからないかもしれませんので、まずヨルダンにおけるパレスチナ人について少し説明したいと思います。ヨルダン国の総人口は950万人ですが、パレスチナ系住民はその約3分の2を占めています。「パレスチナ系住民」とは、難民であることを選択し続けている住民と、先祖や自分はパレスチナ出身でもヨルダン国籍を選択している住民を指します。私のアラビア語の先生もパレスチナ系の方です。両親がパレスチナ人だとか。私が「パレスチナに行ったことがある」と言うと、多くの方が「実は自分もパレスチナ出身なんだ」と誇らしげに話してくれます。パレスチナ系ではないヨルダン人さえ、パレスチナを誇りに思っている方が多いという印象を受けます。

また、世界中のパレスチナ難民数は約549万人と言われていますが、ヨルダンのパレスチナ難民の数は218万人と世界最多です。ヨルダン国内には13のパレスチナ難民キャンプがあり、どれも1950年～1970年頃に作られた古いものばかりです。しかし、依然として難民キャンプ内の就学率はキャンプ外よりも低く、特に女性は文化的な習慣から働けず、十分な収入を得ることができない場合もあります。

私は2012年2月に「聖地の子どもを支える会」のスタディツアーに参加しました。その結果、自分の専門性を活かしてイスラエル、パレスチナの平和に貢献するための一歩を踏み出したいと青年海外協力隊に応募をしたのです。スタディツアーに参加した動機は、もともと平和構築に興味

があったこと、現地での視察が何かのヒントになるのではと思ったことでした。イスラエル、パレスチナを訪れて印象に残ったことは、両国それぞれに痛みを感じていること、そして、たとえ相手を赦すことは難しくても、相手を知り、関係を築こうとしている人々がいることでした。スタディツアーではそれぞれの国でホームステイをし、イスラエルではお茶を飲みながら、パレスチナでは水タバコを吸いながら、家族の話を聞きました。衝撃的だったのは、自分の親族や隣人の誰かが戦闘やテロの犠牲になった経験をみんな持っていたことです。問題のあまりの大きさに当時は、これでは解決方法どころか、希望も見出せないと感じたものです。しかし、現地で、互いの痛みを理解し、新しい関係を築こうとしているNGOや学校の活動を見学したおかげで、市民の力に希望を見出すことができました。

今私は、価値観が異なる人々が多様性を理解し、互いに受け入れ合える社会を作るにはどうすればよいだろうと考えています。私としては、世界中でまだまだ理解が進んでいない「障害者」の支援を通じて多様性への理解に寄与することにしました。

大学卒業後3年半、経験を積むために日本の障害児・者施設で働いたあと、パレスチナ難民キャンプで障害児の支援ができる青年海外協力隊に応募をしたのです。

私が配属される障害児施設での仕事はすべてアラビア語ヨルダン方言で行われるため、現在は首都アンマンでヨルダン方言の勉強中です。アラビア語が多少わかるようになって、ホームステイでお世話になった家族や友人たちとの連絡もこれまで以上に増えました。任地への配属後は、私なりに少しでも両国の平和に資するために力一杯働きたいと思っています。



ヨルダンの首都アンマン（街は丘の上に立っている） 著者提供



▲日本の里親のみなさん、クリスマスプレゼントありがとう！



ある特定の子どもの教育を、毎月一定の支援金で継続的にサポートする里親制度。一歩進んだ国際協力のかたちです。

里親と里子の間で、写真や手紙の交換をすれば（任意）、個人的なつながりが持て、子どもの成長を身近に見守ることができます。

顔の見える支援 里親募集中!

お問い合わせは、当法人事務局までどうぞ

里親になってくださる方を探しています

あなたの支援を希望している里子たちです。



ムハンマドくん



マリアンちゃん

暴力と隣り合わせの現実

ここ数カ月、イスラエルとパレスチナの間に再び緊張が高まっています。双方に毎日のように犠牲者が出ており、相互の不信と憎悪が増しているのが懸念されます。「平和への道」が一日も早く見出せますように!!



▲パレスチナ人少年にナイフで襲われて犠牲となったイスラエル人女性の死を悼む家族

▲イスラエル軍によって引き倒された遊牧民ベドウィン（Bedouin）のテント。これで2度目だ。

◀ヨルダン川西岸地区のパレスチナ人の家イスラエル人によって破壊される前と後

写真：イスラエルの人権団体ブツェレムのニュースレターから <http://www.btselem.org>

そこにも、庶民の暮らしがあります



▲仲良しが集まると誰もが笑顔になりますね（エルサレム）

2015年スタディツアーの一コマ

▼イスラエル人青年たちと楽しい交流（テルアビブ南部のヤッファ・聖ペトロ教会の一室にて）



▲エルサレム旧市街の伝統的なスーク（市場）

▲テルアビブの近代的な街並みと美しい海岸



▲街のパン屋さん（エルサレム）

◀街に買い物に来たパレスチナ人親子（エルサレム）

▲テラ・サンタ学院の朝礼（ベツレヘム）

写真撮影：稲垣佐江子、井上弘子